

京都文化力プロジェクト

2016

2020

Vol.3

The Creative Power of Culture: From Kyoto to the World

創造する文化 京都から世界へ

体感する、 京の文化力

The Creative Power of Culture: From Kyoto to the World

体感する、京の文化力

現在「伝統的」と言われるものの多くが、創生当時「革新的」であったように、今、「はじめる、新しいものをつくる」ことが、100年後200年後の未来につながっていくことを提示したい—京都文化力プロジェクトが目指すものは、未来へのレガシー（遺産）を創造し継承する文化を、ここ京都から明日へ、世界へと発信すること。その実現の一端を担う機関誌として、今号では2018年度のリーディング事業の特集レポートをはじめ、多数のインタビュー記事を掲載。創造の地平を切り開く表現者たちが語る京の文化力を体感してください。



京都文化力プロジェクト 機関誌に寄せて

京都大学IPS細胞研究所所長・教授
京都文化力プロジェクト実行委員会 名誉顧問

山中 伸弥

（敬称略）

私が京都に研究拠点を移してから、15年近くになります。京都には、科学や人文系の分野で最先端の研究が行われている大学が数多く集まっており、研究者どうしが交流しやすい環境が整っていると感じます。

研究環境だけでなく、京都の歴史ある文化も国内外の研究者にとって魅力的です。特に海外の研究者は、プライベートの時間を利用して、京都の神社仏閣などの観光名所を訪れたり、日本の伝統的な料理を味わったりすることを楽しみにされている方も多いようです。文化的な国際交流を通じて研究者どうしが親しくなることは、研究を発展させる大きな力になっています。

今後ますます京都の文化が発展していくためには、大学などの研究機関の力も重要だと思います。いろいろな分野、さまざまな国の研究者が議論しあうことで、研究の質が高まり、その結果、優秀な研究者や学生をさらに呼び込むことができ、京都がますます多様性と活気に満ちた街になるのではないかと思います。そのような研究環境を整えるため、私も微力ながら努力していきたいと思っています。

INDEX

- 03 野外インスタレーション公募展
- 11 クリエイタース・インタビュー 創造のまち 京都
- 17 アスリート×京都 フィギュアスケート選手 宮原知子さん
- 19 京都文化力向上宣言
- 21 京都文化力プロジェクトが目指すもの

街にアートが POP UP!

京都文化力プロジェクト 2016-2020

KYOTO POWER OF CULTURE PROJECT 2016-2020

POP UP MUSEUM 2019.2.16 - 3.17

5万本もの葦^{よし}に囲まれる不思議な空間。
京都文化力プロジェクトにおける2018
年度のコア事業として、街なかに出現した
野外インスタレーション・アート。まさに
都市空間に「ポップアップ」するアートと
して新たな文化体験を提示した取り組み
を紹介します。

都市空間を彩る 新たなアート体験

野外インスタレーション公募展

2016年に始動した「京都文化力プロジェクト」。東京2020オリンピック・パラリンピック等に向け、日本の文化首都・京都が先がけとなってその魅力を世界に発信し、新たな創造の潮流を起こそうとする文化と芸術の祭典です。

2018年度は「アーツアンドクラフツ（美術・工芸）」をリーディング事業として展開。そのコアイベントとして「野外インスタレーション公募展」を実施しました。公募展では、2018年6月から9月にかけて国内外のアーティストやクリエイター、建築家などから、都市における空間を大胆かつ想像力豊かに活用し、自由な発想で体験できるインスタレーション作品を募集。14の国々から111件もの応募があり、審査員を務めた建築家・安藤忠雄氏、森美術館チーフキュレーターの片岡真実氏、京都芸術センター館長・建畠哲氏の3名によって、建築家ユージン・ソレル氏の作品「Kyoto Urban Wind Installation」が大賞に選ばれました。

作品の舞台となる京都は、日本の文化・芸術の中心地として1200年という悠久の時を刻んできた歴史都市であるだけでなく、先進技術を誇る世界的企業がひしめくものづくり都市であり、数々のノーベル賞受賞者を育ててきた学術都市であり、また地球温暖化に先駆的なチャレンジをする環境都市でもあります。そうした多様な顔を持つ国際都市・京都に吹いた新たな創造の

風。伝統と自然、そして人が織り成す大賞受賞作品の魅力に迫ります。

京都の繊細な自然を知覚する

大賞作品が発表されたのは2018年12月4日。受賞したユージン氏には制作補助費500万円が授与され、作品の実制作がスタートしました。展示会場は北山駅にほど近い旧京都府立総合資料館の前庭。京都コンサートホールに隣接する約800㎡の広い敷地です。

ユージン氏の受賞作品は、5万本におよぶ葦を立て並べ、風で揺れると穂先に取り付けたさまざまな鈴が優しい音色を奏でるというプラン。嵐山の竹林に着想を得たという作品で、自然のかすかな動きを都市の中で視覚化・聴覚化しようとする試みです。

この作品は、多くの人やコミュニティ、そして現地の自然と関わりながらつくっていくという制作過程自体も作品の一部。2019年1月からスタートした制作には、のべ100人以上のサポートスタッフが、5000個の鈴を葦に取り付ける作業や5万本の葦を立て並べる作業などに参加しました。

冬の寒空のもとでの制作でしたが、高さ約3m、面積およそ350㎡の大きな作品が無事に完成。まさに竹林の小径のような葦の通路が現れました。葦が風に揺れるたび、時にかすかに、時に賑やかに鈴が鳴ります。作品は、

アートユニットYottaによる作品展示も
同時開催された（京都市岡崎）



「花子」



「金時」

2019年2月16日から一般公開がスタートし、1カ月という期間限定ながら北山の街の新たなアートスポットに。期間中は、さまざまなアーティストたちとのコラボレーションやマルシェなども実施し、訪れた人々はひとときの風の回廊散策を楽しんでいました。

新たな創造の風、京都から世界へ

一般公開初日の2月16日には、京都府立京都学・歴彩館にて授賞式が開催されました。会場では、入選に選ばれたブノワ・モーブリー氏、大松俊紀氏、井口雄介氏の3つのプランが展示されたほか、建築家の青木淳氏や彫刻家・名和晃平氏、京都芸術センター館長の建畠哲氏によるシンポジウム「都市空間における祝祭と文化」も開催（森美術館副館長の片岡真実氏は欠席）。また、同期間中は京都の文化ゾーンである岡崎公園では、アートユニットYottaによる「ヨタの鬼セレブレーション展」も同時開催しました。

2018年度のリーディング事業「アーツアンドクラフツ」において、野外インスタレーション公募展をとおして新たな創造の風をとらえた京都文化力プロジェクト。続く2019年度は「くらしの文化」をリーディング事業として、さらなる文化の創造と発信を続けます。

Kyoto Urban Wind Installation

Interview

野外インスタレーション公募展 大賞受賞

ユージン・ソレール氏

Eugene Soler

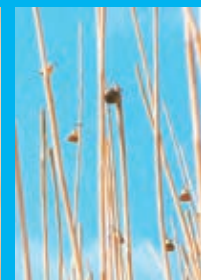
1977年フィリピン、マニラ生まれ。建築家。豪州、ババアニューギニア、スウェーデンで教育を受ける。2003年ニューキャッスル大学（豪）建築学部卒業。05年隈研吾建築都市設計事務所、坂茂建築設計にてインターンシップを経験。10年ロンドンAAスクール空間パフォーマンス・デザインコース卒業。その後、豪州、ロンドン、日本に拠点をおきながら世界各地で活動。第44回セントラル硝子国際建築設計競技最優秀賞。18年には奈良で開催された「ならまち遊歩」にて、インスタレーション作品「ならまちプロジェクト」を発表。現在は奈良市在住。



5000個の鈴にひとつひとつ針金を通すところから制作はスタートした



2月の寒さ厳しい北山に 全国各地からボランティアスタッフが集った



手作りのベンチなどが設置されゆったり過ごせる空間が誕生 期間中は鈴の音が響くなかで様々なパフォーマンスが行われた

人と自然と時間を繋ぐアート 五感で感じる「自然の声」

——まずは受賞されたお気持ちと、作品の見どころを教えてください。

受賞はとても嬉しかったのですが、同時に衝撃を受けました。私のプロジェクトは、5万本の葦に、大きさ、音色もさまざまな5000個の鈴を取り付け、土台に1本1本挿し込むという壮大なプロジェクトのため、一緒に制作に携わってくれる多くの人が必要になります。多数の人が関わるため、嬉しさも多少の不安、緊張も感じました。

今回の公募要項を見た時に、展示場が広大な敷地だったことから、公園のように座って何かを考えたり、ゆっくり旅をしているよ



うな気持ちになれる時間の設計を思い付きました。そして、嵐山の竹林を歩いた時に感じた、大きな自然に包まれるようでいて、時には気づかないくらいの繊細な感覚を、風によって奏でられる多彩な音で表現したいと思いました。自然から放たれる微かな「自然の声」を感じてもらえればと思いました。

——インスタレーション作品や建築において、ご自身が大切にされていることは何でしょうか。

建築物は、できた時点というのは完成ではなく始まりです。実際に人が使うこと、そして時間が経つにつれて周りの自然と交わっていくことで、建物は完成すると考えています。

そして、作品づくりにはなるべく多くの人を巻き込みたいと思っています。特に地元の人、現地の自然や時間も含めたコミュニティ全体ですね。人と自然、そして時間を積み重ねていくプロセスが重要であり、何かをつくることの喜びです。私はアートとは「ど

うやってお互いが関わり合っていくか」であると考えています。

——京都が持つ魅力や課題について、どのようにお考えですか。

私は京都に来るとよく龍安寺に行くのですが、縁側から眺める石庭はもちろん、境内の池や樹木といった自然を通り抜けて進む順路などが本当に素晴らしい。庭園が多い京都は「自然と繋がる場所」であり、魅力を感じます。その反面、テクノロジーが進化するにつれて、人と人、自然と人との断絶が深まっているようにも感じます。便利になったがゆえの弊害ですが、文化や自然、仕事に対する個々の責任感が薄くなっている現代において、そうした繋がりを取り戻すには、互いに責任を持ちながら共に働くことが大事だと考えます。私の今回のプロジェクトでは、自然と向き合う大変さもありますが、人と自然と時間とを繋げる場になると信じています。

審査員コメント



安藤 忠雄 氏
建築家

全体的に、意欲的で挑戦的な作品が数多く見られた。なかでも、わずかな風の動きで繊細な動きを見せ、音を聞かせるユージン・ソレール氏によるインスタレーションのアイデアが目をつけた。風で動く彫刻は他の案にも見られたが、嵐山の竹林にインスピレーションを得たというこの案は、鑑賞者の五感全てに訴えようとする意欲が随所に感じられた。京都の都市環境の中に、その地に相応しい自然の素材で、動きや音に抽象化された自然環境(提案者は「自然の声」と称している)を再現しようという試みは、京都文化力プロジェクトの主旨にも相応しいものと考えた。



片岡 真実 氏
森美術館副館長兼
チーフ・キュレーター、
京都造形芸術大学教授

京都の文化力を象徴するものとして、日本の伝統文化や京都の自然観を特定の屋外空間でどのように表象するかという課題に挑戦した提案が多く見られた。大賞に選ばれたユージン・ソレール氏の提案はコンセプトとその具体的な視覚化、想定される観客の体験が美しく均衡したもので、嵐山の自然環境が凝縮された風や音など、五感に訴える要素も評価した。その他、都市生活と祝祭性を融合したブノワ・モーブリー氏のスピーカーによる彫刻、諸行無常と永遠性を表現した大松俊紀氏の天に昇る階段、既存の建物とダイナミックに関わる井口雄介氏の幾何形体の連続による円環も、コンセプトの本質が巧みに形体化・視覚化され、作品そのものに強度と存在感のある優れた提案だった。



建畠 哲 氏
京都芸術センター館長、
多摩美術大学学長

京都文化力プロジェクトの今回の野外インスタレーションのコンペは、この古都ならではの環境が現代アーティストの挑戦意欲を掻き立てたのであろう、他府県のみならず海外からの応募も多かった。大賞に選ばれたユージン・ソレール氏のプランは、上に小さな鈴をつけた細い葦を密集させた大規模なインスタレーションで、無数の鈴が微風に揺れながら“ホワイトノイズ”を奏でるという、繊細にして不思議なエレガンスを醸し出す体験空間が出現するはずである。オーストラリアから移住し奈良に身を置くアーティストならではの発想というべきか。他にも祝祭性やモニュメントとしての造形性、建築的なユニークな構造など、注目される提案が幾つも見られた収穫の多いコンペであった。

「街にアートがPOP UP!」野外インスタレーション公募展

【応募期間】2018年6月25日～9月23日

【賞 費】大賞1点[制作補助費500万円、作品展示] 入選3点程度[賞金5万円、プラン展示]

【審査員】安藤忠雄(建築家)
片岡真実(森美術館副館長兼チーフ・キュレーター、京都造形芸術大学教授)
建畠哲(京都芸術センター館長、多摩美術大学学長)

【大賞作品展示】2019年2月16日～3月17日 【展示会場】旧京都府立総合資料館 前庭

【表彰式】2019年2月16日 京都府立京都学・歴史館

【関連イベント】

おも茶会
[2019年2月7日、京都芸術センター]
ヨタの鬼セレレーション展
[2019年2月16日～3月17日、岡崎公園(ほか)]
シンポジウム「都市空間における祝祭と文化」
[2019年2月16日、京都府立京都学・歴史館]

【企画・制作】京都芸術センター

創造のまち 京都

京都を拠点に活躍する表現者たちが語る
文化創造都市・京都の魅力と未来。

能を演じ、心で舞う。 片山家の「風」を次代へつなぐ。

観世流能楽師 十世 片山九郎右衛門さん

かたやま・くろうえもん 1964年京都市生まれ。本名清司。父の片山幽雪（九世片山九郎右衛門）と八世観世鍬之丞に師事し、70年「岩船」で初シテ。片山定期能楽会を主宰し全国各地、海外で多数の公演を行うほか、能楽の普及、後継者育成に取り組む。2011年十世九郎右衛門を襲名。受賞歴は、2003年文化庁芸術祭新人賞、13年京都府文化賞功労賞、15年芸術選奨文部科学大臣新人賞など多数。

能には各家の「風」がある

私は、「男は能、女は舞」という家に生まれ、何かを考える余裕もなく、父（九世九郎右衛門）の言われるままに所作をまねて身に付けていくという日々を続けてきました。しかも、その指導は「速い」とか「遅い」とか抽象的な言葉だけ。目に見えない形や色を研ぎ出していくようなもので、正解がない。10代から30代にかけては、まさに闇の中を歩いているようで悩みました。そのため、何か答えが欲しいと、東京の故八世観世鍬之丞先生（つづのじょう）の教えを請うたわけです。でも結局、同じこと。わかったのは、長い時間をかけて大きな心の流れ、風の吹いていく方向みたいなものをつかんでいくしかないという漠然としたことでした。鍬之丞先生も「『風姿花伝』と言うでしょう？つかみどころはないが、片山家にも『風』があるよ」と。「片山家の風」と言っても、言葉にするのは難しい。それは、その曲目に父はどうやって立ち向かっていったかを受け取っていくことなのだろう、と思いました。

そして、舞は舞、能は能と厳しく律してはいますが、京舞とは生活の場もけいこ場も一緒ですので、片山家の能は舞を自然に意識しているところがあります。たとえば「屋島」※1の修羅の世界を表現するには、舞踊がすごい。なので、能を演じながら、心の中で舞っているというようなこともあるわけです。これも片山家の風と言えるでしょうし、こうしたものを次へとつないでいくことが私の大切な役割だと思っています。

多ジャンルと交流できる京の街

伝統工芸が息づく京都は職人の街。これがすばらしい。私たち能の世界にいる者は、

どちらかという時が止まっているようなところがある。ところが、工芸の職人さんたちと接していると、有形のものを扱うせいか実に現代の世相に敏感だと感じるんですよ。そうした職人さんたちとよくご一緒させていただいて、よい刺激を受けています。

京都は「伝統と革新の街」とも言われますが、伝統工芸だけでなく現代アートなども盛んな土地柄で、さまざまな職種の方々と交流できる。1960年代、叔父（片山慶次郎）が関わっていた「上方風流（ぶり）」※2のようなジャンルを越えた交流が、またできるようになっただけいいと思います。

受け狙いでは芸が育たない

ところで、30年ぐらいい前、東京からやってきた能楽師の人たちは「京都の観客は手ごわい」と、よくおっしゃったものでした。同じ演目で同じ演出でも、東京のようにすぐに受けない。いかにも冷めた反応で怖いというわけです。実際、当時の京都のお客さんは何か吟味するようにとても冷静でした。ところが、最近は何だか違うんですね。反応がすぐに返ってくるようになってきた。

これは、演じる者にとっては、ある意味楽しいことで、やれば受けるし、やりやすい。ただ、問題があるんです。反応を求め、芸がどんどん受け狙いで「あざとく」になってしまうのではないかと。確かに、昔から東京に比べ関西の芸風は情感に訴える部分が大い。ですが、それはそれとして、お客さんの冷たい視線を我慢しながら自分の芸を磨き続けていくというのが京都の舞台です。京都は、消費するよりも育てる街のはず。受けることばかりを狙って演じていると能の本質を外れてしま

うことになるのか、能力や芸を育てていくことにつながらないのではないかと……。少し心配ではあります。

継承と発展をステップアップ

現代の日本では、古典芸能を理解し楽しむための背景がどんどんなくなっています。しかし、京都にはまだ、それがよく日常に残っているのです。そうした中で、私は能の絵本化やCG化などでの能楽の普及や後継者を育成する取り組みも進めてきました。今、こうした取り組みのさらなるステップアップを目指し、「伝承の会」※3の活動をはじめ家や京都という枠を越えて能の世界全体へと広げていきたいと模索しているところです。

【※1】屋島＝能の演目。世阿弥作。平家物語を題材に義経を主人公とした修羅能（武人がシテ）の代表作。他流、舞踊では「八島」と。【※2】上方風流＝1960年代中頃、大阪・京都を中心に関西の芸能人、評論家などが新旧・ジャンルを越えて集まり機関誌を発刊。中心メンバーは能の片山慶次郎（八世九郎右衛門の次男）、歌舞伎の坂田藤十郎、落語は三代目桂米朝、喜劇俳優の藤山寛美、大村崑、文楽からは竹本住大夫ら。【※3】伝承の会＝従来、家単位だった次世代の育成を、片山九郎右衛門さんが会長である京都観世会全体で取り組もうというシステム。同時に若い観客を迎え入れる環境づくりも兼ねている。



伝統の技が斬新なアートになる街

漆芸家 笹井 史恵さん

ささい・ふみえ 大阪府生まれ。1996年京都市立芸術大学美術学部工芸科卒業、98年同大学院美術研究科漆工専攻修了。2003～05年ポーラ美術振興財団・ユニオン造形文化財団在外研修生としてタイに派遣。独特のフォルムと漆の艶を駆使した造形作品で08年京都工芸美術作家協会展第30回記念賞、14年京都市芸術新人賞、15年京都府文化賞奨励賞など受賞し注目を集める。京都市立芸術大学准教授。

立体的な造形物を創りたい

大阪での高校時代は、油絵を描いていた。でも、枠の中に納めるというのが苦手。で、立体的、造形的なものが向いていると思い、大学では陶芸を学ぼうと。そして、何となく「京都でろくろ」というイメージがよくて、京都市立芸術大学に入りました。工芸科では、1回生の後期は京都の伝統工芸を代表する陶磁器、漆工、染織を一通りやり、2回生から専攻を決めます。陶芸を目指して入学したものの、焼いて作品が縮むというのが何となく寂しい。化学的なこともちょっと苦手だったんですね。また、作品を「火の神様」に委ねなければいけないというのも、どうも自分向きではない。その中で、これならと思ったのが漆工でした。塗っては研ぎ、研いでは塗るを何回も繰り返し、最後までゆっくりボリュームアップさせながら形を作っていく作業が自分には合っていると。

京都で出会った新しい漆芸と伝統の技

そうして漆工を選んだものの、ほとんど知識がなく、お椀とか蒔絵まきえのイメージくらいしかなかったんです。ところが、実際は伝統工芸のイメージとは大違い。例えば、栗本夏樹先生（京都市立芸大教授）や先輩たちは、造形



金魚（截金・山本茜）
写真：清忠之

的でずいぶん新しい漆芸をされている。これには大変刺激を受けました。同時に、主に漆を使って文化財などの復元を行う有名な工房でアルバイトをすることもできました。お寺や神社に行って剥落止めを施したり、解体して工房に運び込まれた漆塗りの柱を塗り直したりする作業です。この時に、職人さんたちの錬磨した仕事ぶりに接し、ずいぶん漆のことや伝統的な技術に関して勉強ができました。こういう機会があるのは、さすが京都だなと思います。

独創のテーマ、独創のフォルム

漆は樹液、生き物なんですよ。漆と会話をしながら、機嫌を損ねないよう下地をつけていく。これが何とも言えない漆の仕事の魅力ですね。漆の制作は特に研ぎが大変で、本当に根気がいりますが、作品ができあがった時の喜びは何ものにも代えがたい。この魅力と喜びで続けてこられたと思っています。その上、何にでも塗ることができ、蒔絵など伝統の技法も豊富。漆芸の可能性はすごく大きいと思います。

こうした中で生まれてきたのが、丸みと稜線があやなす金魚、ふつくら丸々とした柿、折り重なる花びら…といった不思議な造形の数々。乾漆技法^{*1}で造形したフォルムと「つるつるびかびか」や「しっとりすべすべ」した塗りを施した私の作品は、伝統と独創を併せ持ち、誰もが思わず触りたくなるようなどこか親しみやすい魅力を持っているのではないかと思います。

コラボで広がる新境地

5年ほど前から、他の工芸分野の人たちとコラボ作品を作るようになりました。例えば

竹工芸家の四代田辺竹雲斎^{*2}さんとコラボした「月の舟」は、私が乾漆技法で朱と深緑の上弦の月を表現し、田辺さんの竹細工で天空に光を放っているように見える作品です。また、截金^{*3}ガラスという独自の技法を開発した大学後輩の作家・山本茜^{*4}さんとも共同制作をしていますが、こうしたコラボは一つのジャンルに閉じこもって一人で制作していたのではわからない新しい技術の発見につながります。この試みの成果は、伝統工芸にもフィードバックされ、そのすそ野を広げていくことにもつながるのではないかと。今後もさらに続けていこうと思っています。

京都は、さまざまなアーティストや伝統的な職人、作家、そして漆などの素材にかかわる方たちと交流するには、ほんとにコンパクトでいいサイズの街です。京都芸大も、2023年に京都駅のすぐ近くに移転する計画で、今後ますますこうした交流がやりやすくなるのではないのでしょうか。文化都市としての京都が、さらに面白さを増していくだろうと期待しているところです。

【※1】乾漆技法＝型の上に麻布や和紙を漆で張り重ね、乾いた後、型を取り出す脱乾漆造と、漆と木粉を練り合わせたものを木彫の上に盛り上げて作る木心乾漆造が代表的技法。 【※2】四代田辺竹雲斎＝1973年大阪府堺市生まれ。東京芸術大学彫刻科卒業後、竹工芸家三代竹雲斎の元で修業、2017年四代襲名。伝統的な作品を制作する一方、竹によるインスタレーション、現代的立体作品の制作で知られる。 【※3】截金＝金銀などの箔や薄板を線などに細かく切り、仏像などに張り付けてさまざまな模様を施す技法。 【※4】山本茜＝石川県金沢市生まれ。2001年京都市立芸術大学日本画専攻卒業。重要無形文化財「截金」保持者の江里佐代子氏に伝統的截金技法を師事。ガラスの中に截金を埋め込む独創の技法を生み出す。



無窮の書の道を歩み続ける

書家 杭迫 柏樹さん

くいせこ・はくじゅ 1934年静岡県森町生まれ。57年京都学芸大学（現京都教育大学）美術科（書道専攻）卒業。62年村上三島氏に師事し、同年日展初入選。以後、「打てば快音を発し、切れば水のしたたる」書を追求し、日展内閣総理大臣賞、日本芸術院賞など受賞。国内外で展覧会を開催。主な著書に「王羲之書法字典」「書学体系-王羲之 蘭亭序」「杭迫柏樹の世界」。弓道も六段錬士の腕前。



夢は微生物の研究者だった

ぼくは9人兄弟で、子どもの頃は12人の家族みんなが、まるで競争するように書をする一家でした。もともと書を楽しむ家系で、江戸時代末期の八代目（1788年生）は特に文人として知られた人なのですが、ぼくはその生まれ変わりではないかと（笑）。高校3年の時には静岡県の「席書コンクール」で最高賞の県知事賞をいただいたこともあり、ずいぶん自信を持ちました。

ただ、自信はあったけれども、書の道を進もうとは思っていませんでした。微生物の研究者になり、当時出た結核治療用の抗生物質「ストレプトマイシン」のような治療薬を作れたかった。高校3年の時には、様々な土壌の抗菌性物質について培養研究をし、学校代表として県の科学研究発表会に出て最優秀研究として表彰されました。それで、名古屋大学の理学部に行くつもりだったんです。ところが、ぼくは色覚異常で当時は受験資格をもらえなかった。それなら、好きなことをしよう

京都に来てみたが…

それで、京都学芸大学（現京都教育大学）の美術科に入り、書道を専攻しました。なぜ京都だったかというと、もう一つの特技である弓道（錬士六段）もやりたかったから。京都は伝統の街だから書も弓もどっちもすごいだ

ろうと。ところが、来てみるとどちらもまるで期待外れ。下手同士が褒め合っているといった有様だったんですよ。特に弓道は、徳川家康の元で農民まで鍛えた静岡の方がよっぽどレベルが高い。書もそう。最初は、しまった、来るところを間違えたと思いました。

それでも学生時代は、森田子龍先生^{*1}の前衛の世界に学びました。その雑誌「墨美」でぼくは育った。下宿も近くで、森田先生のご自宅にもよく遊びに行きました。書道って、本当は職人的な技術をきっちりマスターしてからやらないといけな。でも、前衛の世界に行くと、頭でっかちになってしまった。既成の団体には入らず一人でやろうと思い、ずいぶん生意気なことを言っていたのですね。学芸大の10年先輩で書家の古谷蒼韻^{*2}先生から、「お前はチンピラだ」と一喝されたのです。「まったく書く量が足りない」と。この出会いで、目からうろこが落ちました。

生涯の師との出会い

古谷先生に言われ、日展を目指している人を訪ねたのですが、それは驚きでした。畳一枚分ほどの作品を千枚、二千枚と書いている。ぼくは百枚ぐらいがやっと。その後、古谷先生は、村上三島^{*3}先生のところに連れて行ってくださいました。下御霊神社で教室を開いておられ、ぼくの生涯の師となる先生です。今から考えたら下手くそな作品を持って

行ったんですよ。ところが、村上先生は「もうできている。これでいけ」と。ええっ、まさかと思いました。先生は決して自分の真似をしろうとはおっしゃらない。「私は灯台だ。方向が間違った時は言うが、あとは好きにやりなさい」と。ぼくにはこ

れがよかったんですね。師事して3カ月で日展に初入選しました。

京都で追究する無窮の道

最初はちょっとなめていた京都でしたが、書家として暮らしてみると、こんな先生がたとの出会いもあって、これはすごい場所なんだとわかってきました。作家や職人たちが、安易に群れることなく、「狭く深く」を追求する創作をし、生き方をしている。これがとてもすごい。一般人の審美眼も大したもので、古道具屋もたくさんありますが、やはり京都の人は都としての千年の歴史で磨かれた目を持っている。今は本当に京都に来てよかったと思いますね。ほかの土地に行っていたら、書は下手になっていたかもしれない。

ぼくは「書はいのちのかたち」と考え、常に勉強を重ねてきました。例えば王陽明^{*4}の「知行合一」の教えなど、1年のテーマをはっきりと決め、朝の4時ごろから7時ごろまで毎日書いています。こうか、ああかと1枚の紙に200回、300回と重ねて書くので紙は真っ黒になってしまう。そうやって、数年前からは、「いつまで見ていても嫌にならない書」を目指しています。一見平凡に見えるが、どこか微調整が効いて、見れば見るほどよい書——これを、京都に生きながら求めている。書の道は無窮^{むきゆう}です。

【※1】森田子龍＝[1912-98] 兵庫県豊岡市出身。前衛書を目指し「墨人会」を結成、書の総合誌墨美を創刊。書と西洋美術の交流に貢献。 【※2】古谷蒼韻＝[1924-2018] 京都府出身、京都師範学校卒業。1961年日展特選、85年日本芸術院賞受賞など。日本書芸院最高顧問、日本芸術院会員、文化功労者。 【※3】村上三島＝[1912-2005] 愛媛県出身。68年日本芸術院賞受賞、同会員。98年文化勲章受章など。日中間の書道の交流にも尽力。 【※4】王陽明＝中国明代の思想家（儒学者）。実践儒学の陽明学を打ち立て、幕末日本の思想家吉田松陰らにも影響を与えた。



一葉（2005年 第37回日展 内閣総理大臣賞）



土と炎でつなぐ 三代の魂

陶芸家

今井 政之さん
眞正さん
完眞さん

いまいまさゆき 1930年大阪市生まれ。広島県竹原市に移住した後、52年京都で故楠部彌弼氏に師事。53年青陶会同人に。同年、日展初入選。その後、独創の苔泥彩、象嵌技法で現代陶芸に独自の領域を確立。2011年文化功労者、18年文化勲章受章。

いまいまさまさ 1961年政之氏の長男として京都市に生まれる。88年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。同大学非常勤講師、現代美術作家として活躍の後、91年京都に帰り陶芸家を目指す。造形力が特徴の作品で、2002年京都市芸術新人賞受賞。以後、国内外で積極的な作品発表を続ける。

いまいさだまさ 1989年眞正氏の長男として京都市に生まれる。2015年東京藝術大学大学院美術研究科陶芸専攻修了。カニや魚など海の生き物を中心に写実を極めた作品を精力的に発表。竹原で祖父政之氏の助手も務める。



祖父が拓いた創造世界

政之さん 太平洋戦争が終わり、父から「何か平和な仕事を」と言われましてね。父が骨董品を好きだったこともあり、それなら陶芸をやろうと。それなら、長い伝統と創造性豊かな京都の陶芸の世界へすぐにも飛び込みたかったのですが、戦後すぐの混乱期で難しい。そこで、京都の作家さんたちも来ていた岡山の備前などで5年ほど釉薬やデッサンなど焼き物の基礎を学び、ようやく昭和27(1952)年に京都の清水五条坂に來たわけ。すぐ楠部彌弼先生^{※1}に師事し、研究会の「青陶会」

に入って新進気鋭のメンバーたちと切磋琢磨しました。日展に出品しながら、自分の世界を創ろうと作陶に励んだものでした。

眞正さん 長男の私は小学3年生まで五条坂で育ちました。小さな借家の居間の隣が工房で、父は寄合窯^{※2}で作品を焼いていたそうです。山科の清水焼団地に移ったのが昭和46年。楠部先生をはじめ錚々たる陶芸作家も移ってこられたのですが、私にとってはどなたも近所のおっちゃんという感じで(笑)。父の工房では、お弟子さんたちと一緒に粘土を精製する「土叩き」の作業をよくやらされました。土叩きはしんどいですが、陶芸家にとってベーシックで大切な作業なんです。遊び相手の子どもたちも皆、家は陶器屋。何から何まで焼き物とかかわる日々の中で、土が自然に私の体に染み込んでいったと思っています。

完眞さん 僕も特別に陶芸を意識したことはなかったのですが、記憶にもない昔に自分が作ったという亀が残っていて、幼い頃からものを作ることが好きでした。高校は京都市立銅駝美術工芸高校に入り、父と母、叔父(裕之)さんと同じように、僕も東京藝術大学を目指したわけです。

子も孫も陶芸の世界へ

眞正さん 実は私は、大学、大学院、そして非常勤講師と東京にいた10年間は、陶芸ではなくずっと彫刻をやっていたんです。当時、彫刻家のヘンリー・ムーアやマリノ・マリノの大きな展覧会があったことが影響していたかもしれないですね。ただ、藝大の彫刻は粘土で原型をつくる塑造の授業が中心で、塑像を作れば粘土の役割は終わり。なぜ焼かないのか…。土が粗末にされ、かわいそうだと思います。



今井政之〈遊蟹 大皿〉



今井眞正〈丹頂鶴 祭器〉



今井完眞〈海亀〉

いました。そして10年彫刻をやって、体に染み込んでいた土の魅力に目覚めました。そうか、京都に帰って陶芸をやろうと。

政之さん (息子が)帰ってきた時、何も尋ねませんでした。「ああせい、こうせい」と言うことも一切言わなかった。

眞正さん 父から直接学ぶことはせず、自由に作陶を続けました。父たちは陶芸を純粋な芸術にまで高めようと奮闘した世代。そのおかげで陶芸も芸術のジャンルに入ったわけですが、私は逆に工芸品としての焼き物もすばらしいと考え、作品を作ってきました。藝大時代、「工芸品みたい」とか「人形のように」と評されるのはだめな作品のことでした。でも、京都に帰ってその呪縛が解けた。西欧の著名な彫刻家の作品よりもっとよいものが、京都では身近にいっぱいあることに気づいたんですよ。そうやってこれまで独創を目指して

きましたが、最近は不思議とどこか父に似てきたなと思うことも(笑)。

完眞さん 藝大で陶芸を専攻し、ろくろばかりやっているところに、祖父とかぶらない自分なりの作品づくりに挑戦したことがあったんです。ところが、祖父の倉庫を探したらすでに同じようなものがあつた。これは絶対に超えられないなど…。大学4年生や院生になるとやっと好きなものが作れるようになるので、造形物を焼き始めました。今は、カニや魚、野菜など生き物をモチーフに、写実をとことん突き詰めそのものらしさを表現しようと思っています。究極は、人工物なのに自然物に近づいていく作品。そこまで土を極めていきます。

生き物をモチーフに三者三様の表現

政之さん うちの家族は、みんな生き物が好

きでね。例えば、よく一緒に行く石垣島で観察した同じ生き物を、三代それぞれが作品に表現します。ご覧になるとわかりますが、同じ生き物なのに出来上がったものは違いますね。現れた形は違う。が、それぞれの作品には、京都を拠点に土と炎でその本質を表現しようという創造の魂が宿っている——これが、三代に共通する特徴だと思っています。自然の土を自然の火で焼く。私はこれを貫きたいですね。そのためにも、京都で登り窯が復活できるとよいですね。

【※1】楠部弥弼=〔1897-1984〕京都市生まれ。1927年帝展初入選。独自の釉下彩磁など新傾向の開拓と後進の指導に尽力。78年文化勲章受章。
【※2】寄合窯=京焼・清水焼で多く見られた共同の登り窯。自分で窯を持たない陶芸家らが必要なスペースを借りて作品などを焼く。芸術品から工業製品まで多様な陶磁器が焼かれた。



よその街を知って感じた京都の文化力

作家 藤野 可織さん

ふじの・かおり 京都市生まれ。同志社大学大学院美学芸術学専攻博士課程前期修了、文学修士。京都市内の編集プロダクション、出版社に勤務しながら作家を目指し、2006年にデビュー作『いやしい鳥』で第103回文藝界新人賞を受賞。13年、独特の二人称小説『爪と目』で149回芥川賞を受賞。主な著作に『バトロネ』『おはなしして子ちゃん』『ファイナルガール』『ドレス』など。美術館巡り、アクション、ホラー映画の大ファンでもある。

ベラスケス王女の肖像画

母が絵本をよく読んでくれたおかげで、幼稚園のころには字が読めるようになっていて、一人で絵本を読み、そこから自分の世界を広げていったようなところがあります。友だちと遊ばないわけでもなかったし、つかみ合いのケンカもしたり活発なところもありましたが、どちらかというと一人で遊んだり、本を読んだり、絵を描いたりしているほうが好きでした。

母はよく私を美術館に連れて行ってくれました。美術館の最初の記憶は、京都市美術館でベラスケス^{*1}が描いたマルガリータ王女^{*2}の肖像画を見たことです。母は、その絵を見て私が喜ぶと思ったのでしょう。でも、美術館にいたマルガリータ王女は、ちっとも美人じゃなかった。それに、そのドレス姿はこたつの上に上半身が乗っているみたいに見えて、私のお姫様のイメージがすっかり壊されてしまいました。その美術館は、人がいっぱいだったせいもあったと思いますが、小さな私まで照明がとどかず、とにかく真暗という印象が残っています。この美人じゃないお姫様を見てから私は、現実を受け止めて「むやみに夢を見ない子」になったように思います（笑）が、その後も美術館によく通うようになり、美術作品にたくさん親しみました。

そうして、大学では芸術学を専攻して大学院にも行き、美術関係の学芸員を志したのです。ところが、学芸員はとても狭き門で難しい。その時に思い出したのが、小さなころは「お話を書く人になる」と当たり前のようと思っていたことでした。いろいろと純文学寄りの本も読んでいましたし、そうだ、小説を書いてみようというわけで、新人賞を目

指して書き始め、ようやく2006年に文藝界新人賞^{*3}を受賞。そこから作家活動に入ったわけです。

よい文化施設が手近な京都の街

私は予定を立てて行動することが下手で、旅行に行くこともあまりなかったんです。ところが、作家になってからは出版社などのお膳立てでいろいろと旅行するようになり、地域によって伝統も、気候も、光の見え方も、さまざまに違うなあと改めて思うようになりました。そんな中、京都の街は、美術の展覧会にしても私が大好きな映画にしても、よい施設が手近なところにたくさんあります。美術館も映画館も大きな本屋さんも一日で楽に回れる距離。私は、生まれてから今日まで京都市内以外で暮らしたことがありませんので、神社仏閣が多いこともそうですが、これが当たり前やと思っています。が、よそでは、こうはいかないのですね。東京や大阪にはもちろんたくさんの施設がありますが、何せ広過ぎ。何もかもが遠くてびっくりします。

よそでもっと多くのものに触れたいと思う一方で、そのよその街の人のほうが私より京都のことをよくご存じだったという経験も珍しくありません。そのたびに京都ってすごいなや、私もせっかく住んでるんやし、もっと京都のことを知らんとあかな、と思います。

いつかは京都の街を舞台に

私の作品は、日常の中に非日常が起こる。それを極めて写実的に書くことが特徴と言われます。こ

れは、自分では美術の影響が大きいと思っています。画集の作品の中でいろんなことが起こっている。すごく不思議なものもあれば、何の不思議もないものもありますが、私にとっては両方が等価値。同じ受け止め方なんです。細部までこだわるのは大学時代、写真部にいたことが影響していると思いますが…。

私の作品では、世界や日本のどこにでもあるような中小規模の町が舞台になることが多い。あまり意識していないのですが、多分、それは日頃見ている京都の風景や街並みを抽象化して描いているのではないかと思います。機会があれば、一度は京都を舞台に、地名も場所も具体的に記し、地図で追体験できるようなお話も書いてみたいです。

【※1】ベラスケス＝スペインの画家。スペイン絵画の黄金時代といわれる17世紀を代表する巨匠。
【※2】マルガリータ王女＝スペイン王フェリペ4世の娘で、神聖ローマ皇帝レオポルト1世の最初の皇后。ベラスケスによる多くの肖像画が残る。【※3】文藝界新人賞＝文藝春秋が発行する文芸雑誌『文藝界』の公募新人賞。第1回は1955年、石原慎太郎『太陽の季節』が受賞。



スポーツは文化。 世界の輪を広げたい。

フィギュアスケート選手 宮原知子さん

みやはら・さとこ 1998年京都市生まれ。関西大学在学、木下グループ嘱託。5歳でフィギュアスケートを始め、2011、12年の全日本ジュニア選手権で連続優勝。全日本選手権4連覇(2014-17)、世界選手権銀メダル(2015)、銅メダル(2018)や四大陸選手権優勝(2016)など国内外で活躍。17年に左股関節疲労骨折という大けがを負うも、リハビリを経て復帰。18年の平昌冬季五輪で個人4位、団体5位入賞を果たす。京都府スポーツ賞特別栄誉賞と京都市スポーツ最高栄誉賞を2度受賞(2015、18年)。

「ミス・パーフェクト」を育てた京の街

幼い頃から、とにかく練習の虫。ひたむきな努力をこつこつと積み重ねてきた宮原さんに付いた異名が「ミス・パーフェクト」です。異名のとおり、失敗の少ない安定した演技を武器に2014年から全日本選手権を4連覇し、2018年に念願の平昌冬季五輪に出場。日本人トップの4位入賞を果たしました。

2018-19年シーズンもグランプリシリーズなどの国際大会に出場し、トップフィギュアスケーターとして世界を転戦する宮原さん。そんな彼女は京都の街で生まれ育ちました。「小学校の低学年のときは地元の公立小学校に通っていて、近所の児童館に通ったこともよく覚えています」。

今があるのは京都での出会いのおかげ

宮原さんは京都市の出身ですが、スケートと出合った場所はアメリカ合衆国。医師である両親の都合で幼少の一時期をテキサス州ヒューストンで過ごし、その時にフィギュアスケートを始めたそうです。小学生の時に京都へ戻り、伏見区醍醐にあったスケートリンク(現在は閉館)に通います。同じく京都市出身の太田由希奈さんをはじめ数多くのフィギュアスケーターを育てている名門スケート教室・京都醍醐FSCの拠点だったリンクです。「スケートを本格的に習い始めたのが醍醐のアイスリンクでした。そこで今の先生(濱田美栄コーチ)たちに出会えたおかげで、ここまで来ることができました」。

醍醐リンクの閉館後は、冬場は西京極の京都アクアリーナ、夏場は兵庫県の柏原や姫路まで通って練習を重ねたそうです。

実家に戻れば近所を散歩

幼少期をアメリカで過ごし、ジュニア時代から国際大会などで海外へ行く機会が多い宮原さんにとって、京都は「街中にたくさんの文化遺産があり、情緒にあふれた街だなと思います」。海外の選手たちに

とって日本の文化は興味深いようで、彼女らと交流する中で、「日本で開催される試合やアイスショーにはぜひ出場(出演)したい!という声もよく聞きます」と宮原さん。

また、彼女にとって京都はふるさと。やはり、帰ってくると「ホッとする」場所だそうです。シーズンを終えて実家に戻ってきたときは、「近所を散歩することが好きで、ぶらぶら歩きながらかわいいカフェやショップを探したりしています。まだ行ったことのない歴史や文化スポットもたくさんあるので、ぜひめぐってみたいと思っています」。今はフィギュアスケートの選手として世界のさまざまな都市を訪れる宮原さん。子どもの頃とはまた違った京都に出会えるのでは。

スポーツは世界の輪を広げる文化

そして、いよいよ来年に迫った東京オリンピック・パラリンピック。冬季五輪ではないため宮原さんは選手としての出場はありませんが、同じ五輪アスリートとして大注目しています。「自国での開催なので、その熱気を間近に感じられるのがとても楽しみです。出場するすべての選手たちを応援したいと思います」。

さらに、文化都市・京都で生まれ育った宮原さんはオリンピック・パラリンピックの意義について、こう続けます。「スポーツは文化であり、国同士の交流を深めるものだと考えています。選手同士の交流が国同士の交流へとつながり、やがて世界の輪を広げることができるのではないかと感じています」。

自分らしいスケートをもっと磨きたい

いつも全身全霊でリンクに向かう姿が印象的な宮原さん。そのひたむきな眼差しが見つめる理想はまだまだ先にあります。「今、ジャンプの改革に取り組んでいます。これを確実なものにして、自分らしいスケートをもっと磨きながら、目標に向かってこれからも突っ走っていきます。そして、息抜きには京都の街を散歩しながら心を休めたいと思います」。

今後のますますのご活躍に期待しています。



京都文化力向上宣言

京都文化力プロジェクトをより発展させていくために、京都文化力プロジェクト実行委員会の関係者等から、これからの京都の文化力をさらに向上させるためのメッセージをいただきました。

(五十音順、敬称略)

近藤 誠一

元文化庁長官
元在米大使館公使
元ユネスコ日本政府代表部特命全権大使
公益財団法人京都市芸術文化協会理事長

京都の魅力は、長い歴史に育まれた奥深く、洗練された文化の蓄積とそこに暮らす人々や街全体がそれをしっかり体現しているところだと思います。世界的に見れば、パリに匹敵する文化都市が京都です。平安時代から江戸期までの成熟した素地の上に明治以降、西洋から入ってきた異なるパラダイムの文明を進取の気質で積極的に取り入れ、さらに新しい文化、芸術を創り上げたという点ではパリを超えるかもしれません。

その京都に2021年度中に文化庁が移転してきます。グローバル化やIT化が急速に進む現代にあっては、目先の政治、経済課題が優先され、中長期的な投資が必要な文化、芸術にはなかなか財源が回ってきません。文化庁の京都移転は、そうした発想の転換のきっかけになりうと思いますし、またそうしなくてはなりません。

京都は世界的な歴史、文化都市として知られていますが、しっとりした味わい深い本当の魅力は簡単には理解しがたいのではないのでしょうか。また、その魅力をうまく伝える情報発信の仕方にも工夫が必要だと思います。京都に暮らす人々が、日本のため、全人類のために文化力を見つめ直し自信と誇りを持って、文化、芸術の重要性を広く内外にアピールできるリーダーシップを発揮されるよう期待しています。



佐々木 雅幸

同志社大学 経済学部 特別客員教授

明治時代以降、政治・経済・文化のすべてが東京一極集中でしたが文化庁の移転が決まり、京都の役割が高まっています。京都に置かれた文化庁が日本の文化行政をリードしていくことで、地方を含めた日本の社会に新たな潮流を生み出すのだと思います。今後の京都は文化遺産を多く抱える古都の魅力を維持しながら、先端的な芸術を活性化させることによって、新たな文化と産業を創造していく「文化創造都市」になる必要があると思います。

そのためには、若いアーティストやクリエイターが活躍できる「創造の場」作りが大切です。もともと伝統工芸が盛んで芸術系の大学・学校が多い京都ですが、まち全体で盛り上げていかなくてはなりません。アーティスト達がクリエイティビティを発揮できる施設や場所を増やすことが、新たな文化を創造していくことにつながると思います。近代化の波のなかでも維持されてきた、伝統的な町並みや町家を活用することもいいでしょう。美しい自然と歴史的景観とのバランスを保持しつつ、世界にひらかれた多様性のある文化が生まれることが期待されています。



佐藤 卓己

京都大学教授

現実の京都が「文化首都」にふさわしいかどうかはともかく、それを理想に掲げる気概は京都に暮らす私たちに必要なものだと思います。刻々と変動する世界を「政治首都」や「経済首都」の視点から見ただけでは、どうしても視野狭窄に陥ります。情報社会のいまこそ、長期的な射程で全体を展望する歴史的思考が必要なのだと思います。

私は現在、日本マス・コミュニケーション学会会長をつとめておりますが、ジャーナリズムやマスコミの研究領域でも近年は「メディア史」研究がますます盛んになっています。先が見通せないメディア状況だからこそ、バックミラーをのぞきながら前に進むしか道はないわけです。そうした研究にとって京都は最適な学問環境です。大学人としては特に若い優秀な学生や研究者を全国、いや全世界から京都に引き寄せることができるように努めたいと考えています。京都学派はまず戦前の「政治の季節」に花開き、戦後も「経済の季節」に輝きました。「情報の季節」に三度目の百花斉放を期待しています。



やなぎ みわ

現代美術家
舞台演出家

京都の芸術文化を向上させていくためには、伝統工芸における「型」の継承は不可欠だと思います。京都では幸い芸術系の大学などでも、京都の伝統工芸を学べる環境が整っています。私は京都市立芸術大学で工芸を専攻し、型友禅の染色などの伝統工芸を学びました。それが今、現代美術で表現する自分の礎になっています。維持、継続していく力があってこそ前衛的なアートも生まれます。職人が長年育んできた伝統工芸、現状を変革していこうとする現代美術、京都はその2つの力が拮抗する街であるべきだと感じています。

また芸術のなかでも舞台表現には特に、表現する場所が大切だと感じており、今東九条に劇場を作るプロジェクトに参加しています。芸術の拠点ともなり、そこから新たな文化を発信できたらと思い、昨年、「東アジア文化都市2017 京都」の事業で、河原町十条の紡績工場跡地で野外劇を行いました。その際に東九条に住む在日の方や韓国在住の方にも協力していただきました。地元、全国、海外の人々と一緒に芸術活動を展開することで、京都の文化力は一層高まると思います。



山田 純司

公益財団法人鷹山保存会理事長

祇園祭後祭の「休み山」の鷹山が、2022年におよそ200年ぶりに巡行に復帰することになりました。山での巡行復帰に先立って、今年から八坂神社の祭神の名をしたための掛け軸を取めた「唐櫃巡行」を3年間実施します。多くの皆さんのお力添えをいただき、改めて祇園祭のすばらしさ、町衆の力、そして京都の文化力の大きさを実感しています。

鷹山は1826年の巡行時に風雨で懸装品を傷めて以来、巡行には参加せず、その後山本体も火事で焼失しました。何度も復興の声が上がっては消えましたが、2012年に「鷹山の歴史と未来を語る会」を設立し、2年後には離子方ができました。2015年に設立した一般財団法人鷹山保存会が翌年、公益財団法人となり、巡行復帰への歩みに一段と弾みがつきました。

巡行復帰に向けてまだまだ足りないものはたくさんありますが、大口の寄付のほか全国から約500人の有志の皆さんが志を届けてくださいます。頂上に真松を立て、舞台に3体のご神体人形を乗せた江戸後期の姿そのままの鷹山が復活するのももうすぐ。より多くの皆さんとその夢を共有し、喜びを分かち合いたいと思っています。



京都文化力プロジェクト 2016-2020 が目指すもの

創造する文化 京都から世界へ

The Creative Power of Culture: From Kyoto to the World

「京都文化力プロジェクト」は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会等を契機として、日本の文化首都・京都を舞台に行われる文化と芸術の祭典です。

オリンピックは、世界最大の平和の祭典であり、スポーツの祭典であるとともに、文化の祭典でもあります。オリンピック憲章では、オリンピズムとはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探索するものと規定しています。

2020年に向けて、京都から多彩な文化・芸術を世界に発信するとともに、国内外の人々と交流・協働し、新たな創造の潮流を起こしていきたいと考えています。

3つの目標

世界の人々に
京都の魅力を伝え
もてなす基盤をつくる

世界の人々に
京都の総合的な
文化力を提示する

世界の人々と協働し
新たな創造の
潮流を起こす

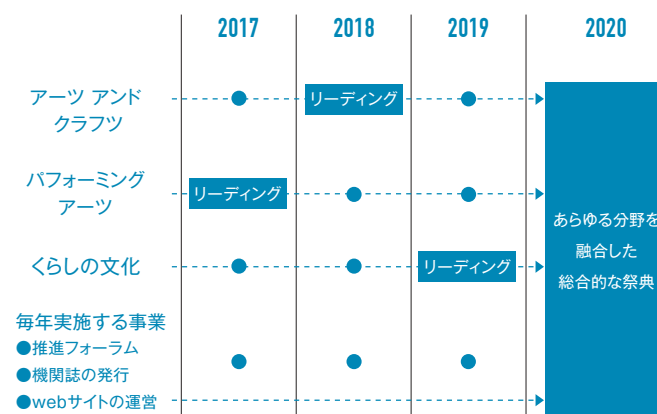
事業展開

現在「伝統的」と言われるものの多くが、創生当時「革新的」であったように、今、「はじめる、新しいものをつくる」ことが、100年後、200年後の未来につながっていきます。

京都文化力プロジェクト実行委員会では、悠久の歴史に育まれてきたヒト・モノ・コトを「美術・工芸」(アーツアンドクラフツ)、「舞台芸術」(パフォーマンス・アート)、日常生活の中に息づく「くらしの文化」による3つの分野の視点を中心に事業を展開していきます。

年度ごとに1つの分野に絞ったリーディング事業と合わせ、その他2つの分野のワークショップやイベントなど、様々な規模で実施しています。

2020年には、あらゆる分野を融合した総合的な文化芸術の祭典を計画。未来への遺産(レガシー)の布石となるよう、活動していきます。



京都文化力プロジェクト実行委員会への入会について

京都文化力プロジェクト実行委員会の趣旨にご賛同いただける団体、企業、個人を募っています。ご賛同いただける場合は下記URLからお願いします。(入会金・年会費不要)

※会員には、beyond2020プログラム(京都文化力)に認証された事業を定期的に配信します。

▶詳しくは <http://culture-project.kyoto/pages/entry/>



beyond2020プログラム(京都文化力)の認証について

京都文化力プロジェクト実行委員会では、2020年以降を見据えた文化プログラムを「beyond2020プログラム」として認証しています。認証を受けることで、ロゴマークを活用した広報や、本実行委員会ホームページのほか、全国の文化プログラムを集約・多言語化するポータルサイト「Culture Nippon」などに掲載され、広く事業がPRできます。

▶詳しくは http://culture-project.kyoto/pages/entry/entry_beyond.html



これまでの活動

2013年(平成25年)

9月 東京2020オリンピック・パラリンピックの開催決定

2014年(平成26年)

8月 「京都文化フェア」呼びかけ



10月 「京都文化フェア呼びかけ」に基づく推進委員会設立
(ワーキング会議設置)

2015年(平成27年)

9月 基本構想中間案公表
・イベントアイデア事業(9月~12月)
・ワークショップ開催(3回)(10月~12月)

2016年(平成28年)

3月 基本構想策定

5月 京都文化力プロジェクト実行委員会設立
(理事会開催、部会設置)

10月 実施計画(総論)策定
スポーツ・文化・ワールド・フォーラム開催

10月~2017年3月 ワークショップ開催(3回)

2017年(平成29年)

1月 大学生による
京都文化の発信・体験プランコンテスト開催

3月 機関誌Vol.1発行

4月 第1回推進フォーラム開催

6月~10月 公式ポスターデザインコンテスト開催

8月 beyond2020プログラムの認証申請受付開始

8月・9月 「東京キャラバン in 京都」開催



撮影:井上嘉和

12月~2018年3月 “伝統×最先端”
球乗り型ロボット衣装
デザインコンペ開催

2018年(平成30年)

2月 機関誌Vol.2発行



第2回推進フォーラム開催



公式ポスターデザインコンテスト表彰式

4月 マルチリンガル
伝統文化ウィーク
in 二条城実施



6月 インスタレーション公募開始(6月~9月)

9月 「茶室と庭をつくろう」
ワークショップ開催



KYOTO・アート6
— 芸術めぐり — 開催



11月 伝統と創生
— 無形文化財保持者たちの
作品展 — 開催



12月 第3回推進フォーラム開催



2019年(平成31年)

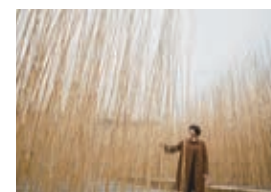
1月 入門冊子
『はじめての近代日本画
京都画壇の
スゴイ画家と作品!』発行



2月 野外インスタレーション
公募展授賞式



シンポジウム
「都市空間における祝祭と文化」



3月 機関誌Vol.3発行



京都文化カプロジェクト 2016-2020 Vol.3

発行：平成 31 年 3 月

京都文化カプロジェクト実行委員会

〒 604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下ル山伏山町 540 丸池藤井ビル 5 階

Tel : 075-354-5413 Fax : 075-354-5414

E-mail : info@culture-project.kyoto

URL : <http://culture-project.kyoto/>



本誌掲載記事・写真等の無断掲載、複写を禁じます。